

平成21年2月13日

国土交通省

富士砂防事務所

富士山周辺で発生するスラッシュ雪崩に注意

1. 概要

静岡地方気象台及び甲府地方気象台は本日午前中、富士山を含む地域（静岡県富士山南東、富士山南西及び山梨県富士五湖地域）に「なだれ注意報」を発表し、13日から14日にかけてなだれの発生しやすい状態が予想されています。富士山周辺では、明日にかけてスラッシュ雪崩発生の可能性が大きくなったものと判断され、富士山麓の溪流には近づかないなどの注意が必要です。

富士砂防事務所では、平成19年3月25日に発生したスラッシュ雪崩による被害を契機にスラッシュ雪崩の発生要因等を調査してきました。詳細は別紙の内容をご覧ください。

2. 注意の内容

別紙（「平成19年3月25日に発生したスラッシュ雪崩の調査結果について 平成20年3月11日」）よりスラッシュ雪崩は富士山全周で発生しています。急激な気温の上昇やまとまった雨が降った場合には、スラッシュ雪崩の発生が予想されます。スラッシュ雪崩が発生した場合、山林や道路に被害が発生する可能性があり、注意が必要です。また、下流市街地にまで影響が及ぶことはまれですが溪流に近づかないなどの注意が必要です。

また、大沢崩れでは堆積土砂量が増大していることから（別紙「富士山大沢崩れの堆積土砂量調査の結果について 平成20年12月4日」）富士砂防事務所はカメラで大沢川等の監視を行います。

3. 配布先：富士市記者クラブ、富士宮市記者クラブ、富士吉田市記者クラブ

4. 問い合わせ先

国土交通省 富士砂防事務所

電話：0544-27-5387（直通）

調査・品質確保課長 永井 健二

〃 調査係長 荒木 孝宏

・・・スラッシュ雪崩とは・・・

富士山周辺で発生するスラッシュ雪崩は、雪代（ゆきしろ）とも呼ばれ、大量の水を含んだ雪が流動する現象で、流下の途中で土砂を巻き込みながら土石流となり、また下流域への到達距離が非常に長くなることもあり、古くから恐れられています。平成19年3月25日にもスラッシュ雪崩が発生し、富士山スカイライン周辺では被害が発生しています

平成 1 9 年 3 月 2 5 日に発生したスラッシュ雪崩の調査結果について

1. 概要

昨年 3 月 2 5 日に富士山周辺で発生したスラッシュ雪崩現象について、発生範囲と速度について調査した結果をとりまとめましたのでお知らせします。

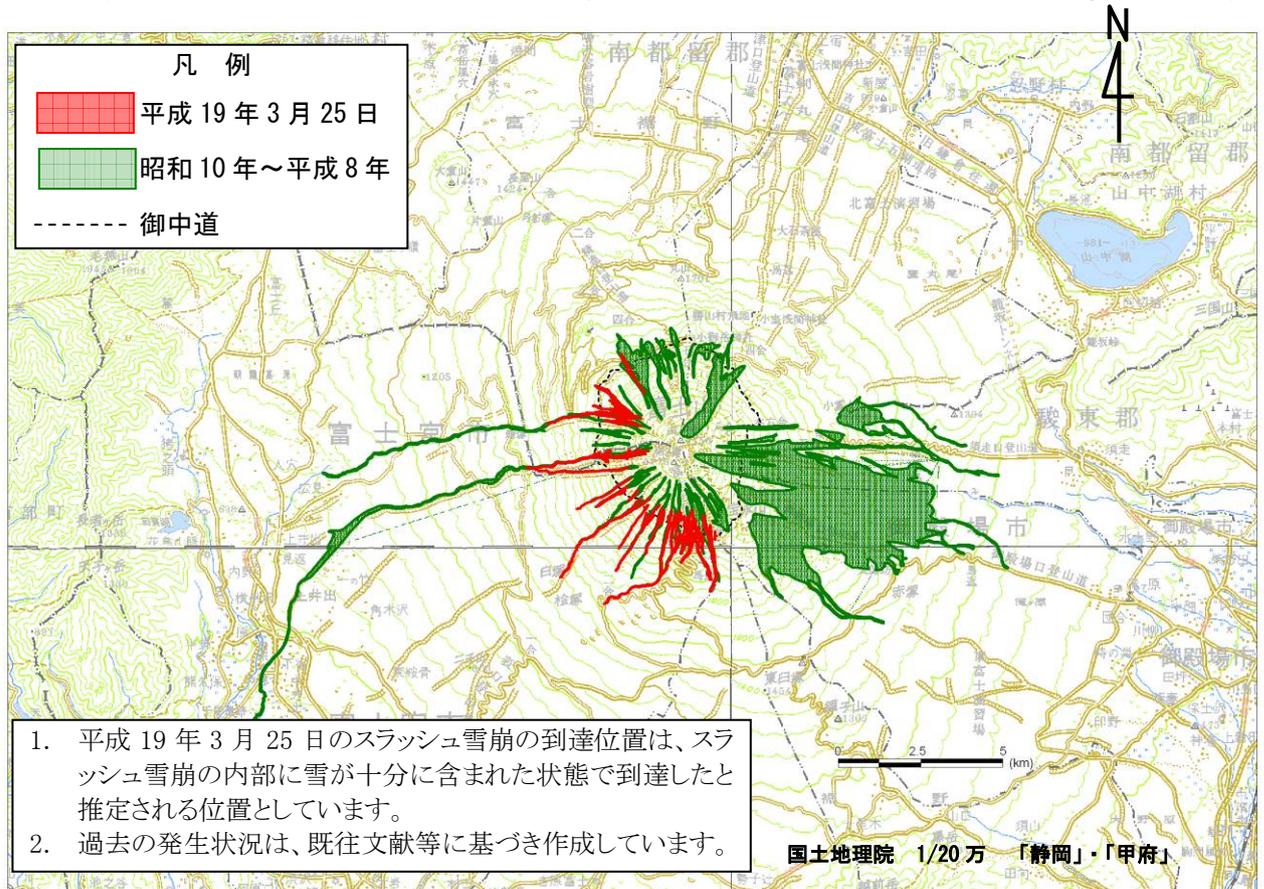
今後 7 月頃まで、急激な気温の上昇やまとまった雨が降った場合には、スラッシュ雪崩の発生が予想されます。スラッシュ雪崩が発生した場合、山林や道路に被害が発生する可能性があり、注意が必要です。また、下流市街地には富士砂防事務所により砂防施設を整備し安全対策を図っていますが、降雨の際は溪流に近づかないなど、十分な注意が必要です。

2. 発生範囲

昨年富士山周辺で発生したスラッシュ雪崩の発生状況は次の図のとおりです（赤色箇所）。

富士砂防事務所管内では、7 溪流（20 沢）でスラッシュ雪崩の発生が確認されました。スラッシュ雪崩は標高 2,700～2,900m 付近で発生し、標高 2,400～1,400m 付近の下流域にまで到達していることがわかりました。

図には、過去（昭和 10 年～平成 8 年）の発生状況についても合わせて表示しています。（緑色箇所）



(図) スラッシュ雪崩の発生状況

富士山周辺では、そのいずれの方向にもスラッシュ雪崩が発生する危険性があり、11 月～7 月（富

士山に積雪のある時期)に発生事例があります。これまでのスラッシュ雪崩によって死者や富士山スカイライン、富士スバルライン等への被害が発生し、スラッシュ雪崩の流下(土石等を伴った流れ)の影響により下流域では氾濫被害も発生しています。

3. 大沢崩れで撮影されたスラッシュ雪崩の映像

平成19年3月25日富士山大沢崩れで発生したスラッシュ雪崩の現象を、富士砂防事務所が設置した監視カメラで撮影しました。カメラ映像では、3月25日午前8時~12時頃までに6回のスラッシュ雪崩が確認されており、8時1分頃と8時46分頃に発生したものは比較的大きな流れでした。カメラ映像を解析した結果、8時1分頃と8時46分頃に発生したスラッシュ雪崩の先頭部の速度は以下のとおりでした。



(写真) 撮影されたスラッシュ雪崩の映像

(表) スラッシュ雪崩の速度

発生時刻	先頭部の速度
8:01	約 23m/s (83km/h)
8:46	約 25m/s (90km/h)

お知らせ

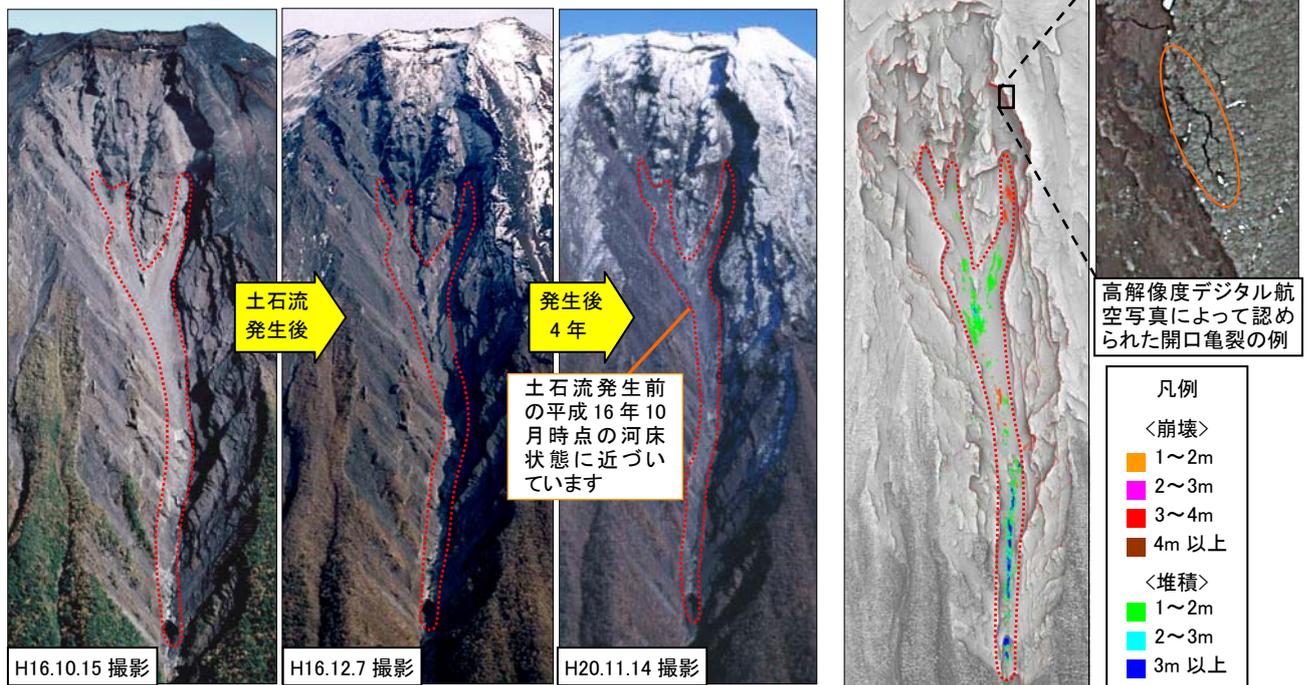
富士山大沢崩れの堆積土砂量調査の結果について

1. 概要

富士砂防事務所では、これまでに大沢川での土石流対策事業とあわせて、源頭部における堆積土砂量についても調査を実施しておりますが、平成 20 年度の調査結果をとりまとめましたのでお知らせします。

2. 概況

現在の大沢崩れの谷底部（図 1、図 2 の赤囲みの部分）の堆積土砂量は平成 19 年 10 月以降の一年間で 3 万 7 千 m^3 増加し、全体で約 32 万 3 千 m^3 となっています。また、高解像度デジタル航空カメラで源頭部を撮影した結果、崩壊が卓越する稜線上に幅 0.1~0.3m の開口亀裂が複数認められました（図 2）。今後も土石流の発生に対して注意が必要です。



3. 谷底部堆積土砂量の推移

平成 16 年 12 月 4~5 日未明に土石流が発生し、堆積土砂量は一旦減少しました。しかし、その後に再び堆積が進行した結果、現在では土石流が発生した平成 16 年 12 月時点と同程度の土砂が谷底部に堆積しています（図 3）。

4. 過去の土石流発生現象

過去、大沢崩れでは、11~12 月や 4~6 月に大規模な土石流が度々発生しています。直近では、平成 16 年 12 月 4~5 日未明に大規模な土石流が発生しましたが、砂防施設（大沢川遊砂地）により土石流を捕捉し、被害の発生はありませんでした。現在も、扇状地整備を推進しており、十分な安全対策を実施していますが、想定以上の事態も考えられるので、十分な注意が必要です。また、当事務所のホームページ(URL: <http://www.fujisabo.go.jp>)で、源頭部での土砂崩落、過去の土石流の映像を公開しております。

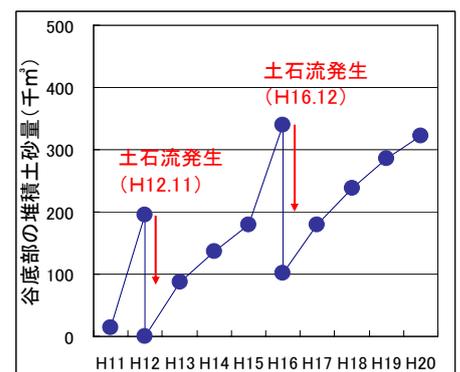


図 3 谷底部堆積土砂量の推移